

後藤丹治博士追悼号刊行にあたって

後藤丹治先生は、近来「椿説弓張月」の註釈等、先生みずから快心とされる述作を著わされ、益々御清硯の趣に拝したのでありますが、はからずも去る五月一日急逝されました。我々後進として、まことにまことに痛惜に耐えないところであります。

先生は、いまさら言うまでもなく、独自の学風をもつて、国文学界に多大の業績を残されました。近世以前の文学作品には、先行文学よりの本歌取りの撰取といふべき制作意識が認められ、その点よりする出典考証は、ゆるがせにできない基礎的研究の一つであります。先生はこの方面における実証的研究に、前人未踏の業績を残されたのであります。

先生は昭和十六年、本学法文学部国文学科創設と同時に教授として赴任され、爾来、後進のために心魂を傾けて指導にあたられたのであります。昭和二十九年、大阪学芸大学に去られた後も、引つづき本学大学院に出講され、御逝去の数日前まで、教壇にたたれたのであります。また、我が立命館大学日本文学会の創立にあたっては、その中心となつて事を運ばれ、その後も、会員として終始されたのであります。ここに、これらの縁によりまして、本追悼号を編まして戴き、先生の霊前に献じたいと思つてあります。

昭和三十八年八月十日

立命館大学日本文学会

会 長 和 田 繁 二 郎